

2002年の本。

私は仕事柄、本屋を訪れることが多いが、最近、驚かされるのは、「勝ち組サラリーマンになる方法」「金儲け指南本」「人生を成功させる方法」から果ては「億万長者になる方法」など、金儲けと成功のノウハウを教える本が店頭に溢れていることだ。

幸福感というのは、人それぞれまったく違う。

人間を一番幸せにしてくれる方法は、自分は自分でいいんだということを前提に、自分の生き方を平常心で、考えるところから始まるのである。

日本人はやりがいのある仕事なしには生きられないということだ。仕事をするなかで、やりがい、生きがいを見いだしながらしか生きられない、と言った方がいいかもしれない。

一番不幸なサラリーマンは評価だけに固執する人だ。評価されること、出世ことすることだけが自己目的化してしまって、何のために働くのかということを考えない。つまり、基本的な人生観がまるでない。そこから悲劇が始まるのである。

例えばバブルのピークの八九年頃には、平均株価は五万円を超えるものだと多くの人が思っていた。だから、**今株を買わないやつはバカだ**という**雰囲気**だった。新聞、テレビ、週刊誌などあらゆるマスコミに株式評論家が出てきて同じようなことを言っていた。それに惑わされてしまう人というのは、結局、基本的な価値観を持っていないのである。つけ加えれば、企業についてもこの点はまったく同じだ。バブルに踊った企業のポリシーというのは、**収益第一主義**だったり、もっとひどい場合は他社がやるから自分のところもやるという**横並び主義**だったり、いずれにせよ、とても価値観とは言えないものなのである。

前章でも述べたことだが、私は金儲けが悪いといっているわけではない。要はバランス感覚なのである。

古今東西の歴史を見たときに、**通貨が高くなって不幸になった国はない、国が潰れる時は通貨はたたき売られるんだ**、というのが下村氏の説明だった。

しかし、為替相場をめぐる表面的な、非常に単純な議論というのは、日本はもの作りの国で、輸出立国だ。円高になると輸出産業の自動車、電機産業など幅広い産業がダメになって、失業者が出て、経済が破綻する——。いつもこういう議論を繰り返す。八〇年代後半もまったく同じことが言われた。

ところが、その後何が起こったかという、バブル経済となって景気は絶好調、日本は一気に金持ちな国になった。通貨が高いということは、その国の通貨を持つことがいいということだ。

まず、**金利の自由化**と言うことが**85年から段階的に始められた**。

それまで、金利が固定していた時代には、銀行は預金さえ集めてくれば、確実に利益を上げることができた。ところが自由化が進み競争原理が持ち込まれるやいなや、銀行は大変な危機感を抱いた。そこへ、**株価がドンドン上がり始めて、企業は直接金融へシフト**し始めた。

企業が**転換社債**を発行すると、株が上がって、それが株に転換され借金がただになる。あるいは、株式の時価発行増資をやり、配当だけ払って元本を払わなくてもいい。まるで、ボロ儲けだった。日本の企業は、直接株式市場から非常に低いコストで、資金を調達するという夢のような錬金術をそこで見つけてしまったのである。それで、日本はこの時期に一気に**直接金融に移行し、銀行は要りません**という風潮が強まった。

当初、企業はじつはこういう方法で調達した資金を、多角化とか、構造改革に回していた。ところが、だんだんいくらでも**タダで金が入る**じゃないかということになると、改革意欲はアツという間に吹っ飛んでしまった。お金がお金を生む状況になるなかで、いわゆる財テクが一番効率のいい投資だということになってしまったのである。

一方で、**直接金融の台頭に危機感を募らせていた銀行は、なりふりかまわず不動産に融資**をし始める。不動産市場に大量の資金が入り込んだことで、不動産価格が暴騰しそれがまた新たな資金を呼び込む形で、不動産バブルも過熱していく。バブルが本格化するなかで、銀行は土地と株を担保にドンドン融資残高を増やしていった。それがまたバブルを過熱させていく……。

金融危機の事実を肌で感じた検査官や金融庁の若手からは、自分の任期中には面倒なことはやめてくれと言わんばかりの幹部に対する批判が、あちこちから出ており、それが外部にも漏れ伝わってきている。経営危機を取り沙汰されていたある銀行の検査結果が出た時のことだ。それがあまりにひどいのですぐ手を打つべきだということで、現場から**金融庁の幹部へと報告が上げられた**。すると、その幹部は「これはずいぶんひどい、一年くらいかけてもっと詳しく調べろ」と命じた。そして、自分はその間に任期を終えて退官してしまったのだという。

あるいは、同じく経営危機の噂がある地銀については、検査結果を見せられた金融庁の最高幹部などは、**どうしてこんなひどい数字をオレのところに持ってくるんだ**と怒鳴

った。それでも数字を上げた現場の責任者が、このままだと処理せざるをえないと進言したら、この幹部は、君は私が一年半かけてやってきたことを全否定するのかと、怒り出したのだという。要するに今まで、あの手この手を使って問題を先送りさせてきたということだろう。

金融庁も全部が悪いわけではなくて、第一線で働く役人は、目を覆わんばかりの不良債権の実態に関しては、もう処理しなければいけないという認識を持っている。ところが、**幹部クラスから中間管理職は、その多くが自己保身に走っている**。自分の任期を大きな処理に直面しないでまっとうしたいという気持ちが金融行政のすべてを支配していると言ってよい。

銀行というのは、預かったお金を預金金利以上に回さなければもうからない商売だ。だから、少なくとも金庫のなかには、お金はできるだけ少なくしたい。これが近代的な銀行経営のきわめて常識的な姿なのである。

ということは、どんな銀行でも預金者が殺到して、一度に大量の預金が引き出されるという状況が発生したとたん、その銀行は破綻してしまう。

人間というのは全部別個なのである。女だから、老人だからというのは理由にはならない。男性より優秀な女性は多いし、七十歳でも下手な若者よりはずっとバリバリ働く人もい。こうした**本当の人間の優秀さが、現在の人事制度では評価できない**のである。サラリーマンという範疇に限ってみても、評価の多様性のなさ、硬直化した昇進システムが潜在力のある人材を埋もれさせる大きな原因となっている。

要するに大切なのは専門性なのである。この二十年間、企業の取材を続けてきてつくづく思ったのは、やっぱり自分の人生を全うできる人というのは**専門家だけだ**ということだ。どんな細かい分野のスペシャリストでもいい。何かひとつでもこれをやっていたら、食べていけるというものを作らなければならない。

人と同じことをするにしても、ここが違うというものがなければならない。例えば世のなかに**経理マンはたくさんいるが、ほんとうに会社にとっていい経理ができる人は、じつは少ない**。だから、それができれば引く手あまたになる。

集団合議制で変化を起こすなんてことは絶対ありえない。

投資信託

80年当時、配当がつくどころか、多くのものが元本割れしている。

運用は専門機関に委託される。販売と運用を分けて健全性を担保している。

しかし、これは現実には意味がなかった。運用機関はみな証券会社の子会社だったから。

子会社は、親会社からの出向者で占められている。親会社が苦しければ、株式手数料収入を上げるために株を買うことになる。運用専門会社が注文を出して親会社に手数料を稼がせた。

投資信託は売る側が確実にもうかる。売った証券会社や銀行には、運用委託会社から手数料がいく。

客は投資信託を売買するときの手数料と信託報酬を払う。

客はずっと手数料を取られ続けて、それを売った方はリスクゼロで儲かり続ける。

少なくとも私は、投資信託などは絶対に人に勧めないし、自分も絶対購入しない。

下げ基調でも、1年に2回ぐらいは上がる局面がある。

・・・

やはり上がるところで買わなければ儲からない。下がるところで株を持っていたら、損してしまう。上がる局面、下がる局面を見きわめて、下がる局面では休むことが大切なのである。

ところが、**素人ほど株を持ち続ける**。特に株で損をしている人を見ると、共通しているのは、いつも株を持っているということだ。ひとつの株で儲かったら、**売って現金に換えておくべき**なのだ。そして、すぐ他の株に乗り換えるのではなく、しばらく休んで、市場の動きを見るのである。

長期投資は、儲かったら売らなければならない。

・・・

天井で売ったり、底で買ったりなどということを考えてはいけない。

私は株式ということについて言えば、今後十年は非常に有望だと考えている。今株式市場に投資しておけば、今後十年の間に必ず大きな山がくるだろうから、そこで全部売り切ってしまうのだ。

何を買うかはこれまで説明してきたことを参考にしてほしい。まずは、日経平均やTOPIXに連動した投資信託であり、それから、日本を代表する産業の上位にはいるような大手企業の株式だ。ただし、商社や流通などのように先行きが不透明な業界の株は買わない。また、新興企業の株はその会社が本当に三十年持つかどうか冷静に考えて、持つという確信があるなら買えばいい。それがなければ今どんなに株価が高くても、そのぐらいつぐ下がってしまう可能性があるから、買わない方がいい。一方売り時については、世間みんなが株式投資に走り出した時だ。一般週刊誌やテレビ番組で株の話が目立ちだしたら、すぐに売った方がいい。これまで書いてきたことのまったくのくりか

えしだが、大事なことなので、是非とも忘れないでほしい。

株がいいと言っても、401kの運用でその比率は、三分の二くらいにするべきだろう。そして、十年のうちに大きな波がきたら、先程述べたタイミングで、すかさずそれを売って、今度は金利の高い元本保証の金融商品に乗り換える。そのうちに株式市場は下がっていくだろうから、それを何年か眺めながら、もう十分に底を打ったと思ったら、再び一定額を株式投資に回す。これを、だいたい二十年くらいのサイクルで行うというのが、私が考える長期投資戦略である。

中古マンションを買うなら97年以降のもの。

バリアフリーが当たり前。風呂場ですら段差がなくなっている。